

を解析すれば、これまでの理論で仮定していたことがどこまで妥当であったかを評価できるし、そもそも、思ってもいなかったようなことが起こっていたりする。計算機の能力がますます向上しているだけに、「まずは、ちゃんと解いてみる」というのが研究の基本姿勢の一つになりつつある。

観測では、ネットワーク化により面的な情報を得ようという傾向が目立つ。A. Manson (サスカチュワン大) はカナダで、VHF レーダー網を築く話をし、R. Vincent は現業の高層観測データを活用する計画を発表した。数値予報のために集められるデータとしては、指定気圧面と特異点の値だけが通報されているが、ラジオゾンデ観測自体は、鉛直分解能が 50 m 程度であり、1 ケタ以上多い情報量をもっている。これをそのまま集めて解析すれば、重力波の動態が詳細にわかってくるはずである。オーストラリア国内では、彼が中心となって、この計画

が実施されつつある。また、最先端のライダー観測所 (Arctic Lidar Observatory for Middle Atmospheric Research) の計画やスペースシャトルを使った中層大気の中小規模現象の観測 (CRYogenic Infrared Spectrometer and Telescope for the Atmosphere) の計画など、新しい観測計画の話もそれぞれ興味深かった。

スーパーコンピュータや新しい観測技術の進歩により、中層大気研究の新展開が始まっているという印象を強くうけた。このような流れのなかで自分の研究をどう位置づけ、どのように発展させていくか、日常生活を離れてじっくり考えることができた。また、日頃思っていたいくつかの疑問を J. Holton や M. McIntyre に尋ね、ゆっくり議論できたことは有益であった。

今回のワークショップに参加するにあたり、文部省創成的基礎研究費「気候モデルの開発および気候変化の数値実験」(代表 松野太郎 東大教授) の補助をうけた。

## 日本気象学会1992年度秋季大会の報告

日本気象学会1992年度秋季大会は、1992年10月7～9日に札幌市教育文化会館および北海道厚生年金会館で行われた。参加者数は362名(通常会員256、学生会員71、会員外35: なお招待者等を除く)であった。

大会シンポジウムは「都市の豪雪」をテーマとして、会場利用時間の制約等により前回同様1日目午後に行われた。これに先立ち、山本・正野論文賞1件、堀内基金奨励賞2件、および春季大会から持ち越した学会賞の記念講演が行われた。その他、大会前日(6日)には北海道大学で2つの研究会(メソ気象および大気海洋相互作用)が開かれ、第2日(8日)夜には大会会場でオゾン研究会が開かれた。

発表申込件数は284件(ただしキャンセルが数件あった)で前回(289件)に引き続き多く、その内訳は第1種講演が205、第2種講演が68、ポスターが11件であった。第2種講演として申し込まれた講演のうち、予稿の書き方が第2種の要件を満たさないためプログラム編成時に

第1種に変更されたものが24件(前回は29件)あった。

前回から口頭発表を4会場にしたため、時間には比較的余裕のあるセッションが多かったが、第1種講演の中には持ち時間を大幅に超過したものが見受けられた。この点については、これまでに引き続き発表者の協力をお願いしたい。また、第1種・第2種・ポスターによる現行の講演方式や時間配分についても、会員の皆様の声を反映させて改善していきたい。ぜひ、講演方式に関する率直なご意見をお寄せ下さい。

各会場とも設備は良く、マイク・スピーカーや OHP 等の性能も良好であった。地方大会の常としてマスコミの取材が多かったが、発表への支障を避けるための配慮が見られた。これらの点を含め、今大会事務局として大会準備・運営にご尽力頂いた札幌管区气象台および北海道大学の皆様に深く感謝の意を表します。

1992年10月 講演企画委員会